Kameda

2023.11 No.276

一歩先をゆく急性期ケア

亀田メディカルセンターの理念

私たちは、全ての人々の幸福に貢献するために
愛の心を持って常に最高水準の医療を提供し続けます

最も尊ぶこと ：患者さまのためにすべてを優先して貢献すること
最も尊ぶ財産：職員全員とその間をつなぐ信頼と尊敬
最も尊ぶ精神：固定観念にとらわれないチャレンジ精神

CONTENTS

亀田総合病院報
No.276
2023年11月号

3 巻頭言
4 かめナビ　一歩先をゆく急性期リハ
8 看護の目
10 Close Up News
14 病院は誰かの仕事でできている

巻頭言

ジャミーンと情報の可視化

医療管理本部 副本部長　大池 康礼

幅広い年齢層を巻き込んで、ハラハラドキドキさせてくれた日曜劇場『VIVANT』が終了しました。毎週、楽しみにしていた方も多かったのではないでしょうか。そんなドラマの中で、毎日私の近くにいて欲しいと感じさせてくれたのが、ジャミーンです。良い人とそうでない人を直感的に見抜ける少女という役柄で、ベキの写真を見せた時の表情を見て、主人公の乃木はそれまでの自分の推測を修正することができました。

さて、私を含めた“普通の人”にも、いろいろな直感があり、また知識や過去の経験を組み合わせて、状況を理解、判断しようとします。しかし、それを見ただけで正しく見分けられるような能力はありません。

では、“普通の人”にできることは何でしょうか。まず、感じた直感や漠然と感じている問題意識が本当にそうなのか、ということをもう一度振り返る。自分の思い付き、思い込みではないのか、を丁寧に確認することです。そして丁寧に確認するためには、その事実をきちんと目に見える形で考える、すなわちデータで考えることが大切です。

もう1つ注意しておきたいのは、人は見たいものを見るという“普通の人”の習性があることです。何かデータがあればそれが事実のように見え、その中で答えを出したくなります。どのような目的でどのようなプロセスで、そのデータが作られたかについて、最初に丁寧に確認するようにしましょう。どんな事実を集め、データ化し、組み合わせると、確認（＝答え合わせ）ができるかを考えられれば、半分は答えが出せたも同然です。

そして、データ化できれば、それが何を意味しているかを自分の言葉で説明できるまで、色々な切り口で分解してみましょう。また、そのデータが最初に感じた自分の直感や問題意識と同じかどうか確認（＝答え合わせ）をしてみて下さい。これらを丁寧に繰り返すことで“普通の人”もジャミーンに近づいていけるのではないか、と思います。

次に、情報の可視化（＝見える化）についてです。もちろん、自身の考えを丁寧に確認する際にも可視化することは有効ですが、それ以上に大切で、工夫が必要なのは他の人と共有したい時です。いろいろなグラフ化の方法や技術があり、私自身も苦手でいつも頭を悩ませています（他の方のお力を借りることも多いです）。そのような中で心に留めていることは、事実や分析結果よりもどのようにして自分の問題意識を共有していくか、という点です。それができれば、共感が得られる可能性も高まります。また、問題意識さえ共有できれば、見えていない事実を追加してもらうことも、別の課題解決のアイデアをもらうこともできます。学問や科学と異なり、現状を良くしていく方法は複数あります。

最後までアナログで恐縮ですが、「情報とは、情（なさけ）を報（しら）せるもの」と、私に病院経営の基本を教えてくれたある病院長が、繰り返しおっしゃっていました。亀田は、医療を必要とされる患者さまのものでもあり、働く職員のものでもあります。一人ひとりが事実を見つめ、問題意識を共有し、解決する仲間づくりをして、未来を創っていきましょう。

一歩先をゆく急性期リハ

「健康寿命」を延ばす

過疎化・少子高齢化が著しい南房総。安房3市1町の人口構成を年齢区分別にみると、0～14歳の年少人口は8.4%、15歳～64歳の生産年齢人口は48.9%に対して、65歳以上の老年人口は42.7%（千葉県年齢別・町丁字別人口令和5年度より）にのぼります。

高齢であっても自立した生活が送れているうちは、暮らしに支障はありませんが、病気やけがで寝たきりになり介護が必要になると、ご本人はもちろん家族の生活は一変します。退院後、自宅で過ごすにしても、食事やトイレ、入浴など日常のいたる場面で介護が必要となるため、家族の誰かが仕事を辞めざるを得なくなることがあります。家族の肉体的、精神的負担を減らすために各種介護サービスを受けたり、介護施設への入所を選択するにしても経済的負担が大きく生活にのしかかります。

それは単に一家族の問題にとどまらず、地域社会や経済、医療・介護・福祉サービスの提供に至るまで、大きく影響する問題でもあります。地域で暮らす誰もが、安心して、その人らしく人生を過ごすためにも、超高齢社会を迎えた今、自立して健康に過ごせる「健康寿命」を延ばすことが強く求められています。

そうした社会背景のなかで、病気やけがを発症してから患者の症状が安定するまでの期間（急性期）の治療を担う急性期病院の役割も、臓器別の専門医が病気を治すだけでなく、栄養管理やリハビリテーション（以下、リハ）により、退院後の在宅生活を可能にする「治し支える医療」にも注力するよう変わってきました。なぜなら、入院後いち早くリハを開始することが、寝たきりを防ぎ、病気やけがで低下した身体機能の回復を促すカギを握るからです。

社会的ニーズは増えているのに…医師が大幅に不足するリハ科

超高齢社会を背景に、全国のリハ科を標榜する医療機関数は5,630施設（厚生労働省による2022年医療施設動態調査・病院報告より）と、内科に次いで2番目に多い一方で、リハ科の専門医は2,921人（日本リハビリテーション医学会WEBサイトより：2023年9月29日現在）に留まり、リハ科を標榜するすべての医療機関にリハ科専門医がいるわけではありません。

リハビリテーション科主任部長の宮越浩一医師によれば、「リハ科専門医不在の病院では、主治医の処方でセラピスト（理学療法士・作業療法士・言語聴覚士）が対応するため、セラピストのおまかせリハとなり、担当者の技量による差や、ゴール設定や目的が不明確で漫然とした治療になるデメリットがある」といいます。また、在院日数の延長や合併症のリスクなど、患者の治療の満足度を下げることにつながりかねません。リハ科専門医は毎年100人程度増加していますが、これに対して理学療法士、作業療法士、言語聴覚士の資格取得者は毎年17,000人程度誕生していることを考慮すると、リハ科専門医の不足問題が続くことは確実で、質の高いリハ診療を提供し続けるためにも、診療体制やシステムを再考する必要があります。

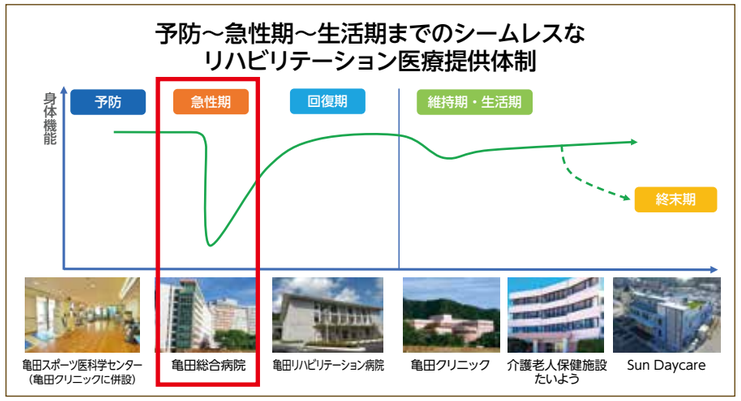
リハビリテーション科
主任部長
宮越浩一 医師

当院のリハ医療

健康づくりを目的とした予防から、疾患の治療とあわせてリハを進めていく**急性期**、リハによる機能回復が中心となる**回復期**、日常の生活機能を維持するためのリハを行う**維持期・生活期**、最期の瞬間までその人らしく生活していただくためのリハを行う**終末期**、それぞれの場面での役割があり、亀田グループ（医療法人鉄蕉会・社会福祉法人太陽会）では予防から終末期まで、病態別に求められる専門的なリハ医療を切れ目なく提供できる体制を整えています。

このうち亀田総合病院が担うのは急性期リハです。病気やけがにより、ベッドで安静にして体を動かさない状態が長く続くと、筋力低下や日常生活動作能力の低下、せん妄や血栓症などの合併症を招きます（＝廃用症候群）。特に高齢者はもともと「虚弱」（筋力や活動が低下している状態）の方が多く、入院中に立つ、歩くなど基本動作ができなくなる恐れがあるため、急性期医療の現場では集中治療室にいるときから積極的なリハ医療が開始されます。

ただし、病態がまだ不安定な重症患者に対して離床や運動負荷をかけることにはリスクを伴います。安全面に十分な配慮を行いつつ、必要なリハを行っていく――このバランスを考慮しつつ、早期リハでより高いレベルまで機能回復をめざし専門的なリハ治療が密度高く提供されます。また、ケアマネージャーと連携した円滑な退院支援サービスや、回復期病床など後方支援病院へのスムーズな移行にも対応しています。



タスクシフトで早期リハを実現

千葉県の三次救命救急センターの指定を受ける亀田総合病院（917床、35科）の場合、重症患者の割合が高く、病棟で介助が必要な患者（常時450～500人）に対して、入院・手術の早期から積極的なリハ治療を365日体制で提供しています。短期集中型の医療が展開される急性期病院では患者の入れ替わりサイクルが早く、各診療科の受け持ちの医師からリハ科医のもとへ届く新規患者のリハ処方件数は1日20～30件、年間で8,750件（2021年度）にのぼり、リハ科医4人とセラピスト（理学療法士86人・作業療法士10人・言語聴覚士7人・歯科衛生士2人）※約100人体制でこれに対応しています。

宮越医師によれば、「急性期専従で100人、関連事業所を含めると約260人のセラピストを配置して、365日リハを提供している施設は全国でも稀」だといいます。これほど手厚い診療体制を敷いてリハ医療に取り組む理由は、安房地域の高齢化率の高さや、地域の砦として新生児から高齢者まで多種多様な疾患やけがへの対応が求められることが挙げられます。

しかし、当院であってもすべてのリハ依頼にリハ科医だけで対応することは困難です。そこで、セラピストへ業務の一部を移管する「タスクシフト」を進めることで、数多くのリハ依頼に速やかに対応しています。それを可能にしているのが、「リハビリテーション事業管理部が取り組む徹底した品質管理と“Smart & Tough”な人材育成にある」といいます。より専門性を高めたいというセラピストに対して、2022年からアテンディングセラピスト養成（タスクシフト養成）を始めたところ、勉強熱心なスタッフが集まり、2年間で約40人が受講。既定の講習と試験をクリアしたセラピストには院内資格として「タスクシフト認定資格」が授与され、早期リハの開始に欠かせない「リハ実施計画」に必要な多角的な患者の病態評価の場面などで活躍しています。

※2023年4月時点の在籍数

タスクシフトの実際

〈当院でのリハビリテーション診療のフロー〉

受け持ちの医師からリハビリテーション処方

▼

リハビリテーション科医師がカルテを確認

・合併症リスクのスクリーニング
・ハイリスクの患者はセラピスト向けにコメント

▼

PT・OT・STがベッドサイドを訪問して評価

▼

初診記録作成

・PT・OT・STが標準化された書式で記載

▼

リハビリテーション科医師が初診記録を確認

・問題がなければセラピストの初診記録を承認（カウンターサイン）
・気になる症例は担当セラピストと相談するかカルテでフォロー
・必要に応じて診察

▼

カルテで経過観察

・診療過程で問題があればセラピストから相談

＊PT：理学療法士・OT：作業療法士・ST：言語聴覚士

各診療科の主治医からリハ処方が届くと、リハ科医はカルテで患者状態を確認します。この時、合併症のリスクをスクリーニングし、ハイリスク患者の指示をセラピストに行います。

指示を受けた担当セラピストは病室を訪問し、「リハ実施計画」を立てる上で重要な患者の心身の状態を実際に確認しながら評価をしていきます。難易度が高い困難な症例患者の場合は、セラピストとともにリハ科医もベッドサイドを訪問し、安全管理やリハ治療方針について個別に検討します。

そうして作成された「リハ実施計画書」をもとに、患者への説明・同意を得て、リハ治療が開始されます。タスクシフトを進めることで、リハ依頼から実際の治療開始までのブランクを最小限にすることができ、脳卒中の患者の場合で入院からリハ開始まで2日と早期から治療が開始されています。

宮越医師によれば、「タスクシフトを進めるにあたり、セラピストが困難な症例を抱え込まないよう初診スクリーニングの情報共有や、リハ科医とセラピストの情報交換には、電子カルテや病院貸与のスマホなどで利用可能なビジネスチャットツール（Microsoft Teams）を活用している」といいます。セラピストの日勤時間帯中は密に診療スケジュールが組まれているため、診療効率を下げずに手が空いたタイミングで治療方針の相談やリスクスクリーニングについて必要な確認が行えるなど、ICTの活用による業務の効率化も図っています。

リハ科医と同じような視点で患者の状態を把握できるセラピストが各チームで活躍することで、ハイリスクな患者に対しても安全なリハ治療を提供することが可能になり、医療の質向上にも貢献しています。

病態に応じたリハの提供

セラピストは診療科・疾患群特有のリスク管理や治療体系に応じて6つのチーム（内部障がい、脳血管、運動器、スポーツ、総合診療、がん）に分かれて、医師や看護師など多職種と連携しながら診療にあたります。

脳梗塞の患者であれば、「脳血管チーム」がリハ治療にあたりますが、患者の状態に応じて早期からの積極的な離床を進めます。例えば、1～2日目はベッドに座ることからはじめ、3～5日目で補助具などを用いて立ち上がった姿勢をとる治療を行います。その後、全身状態に応じて段階的に運動療法を行うなど、担当医やリハ科医と相談しながらリハ治療が進められます。治療経過の中では、日常生活動作（ADL）を運動項目（食事や更衣、排泄、ベッドやトイレへの移譲、車いすや歩行での移動など）と、認知項目（コミュニケーションや社会認知など）に分け、それぞれ自立しているか、介助が必要か、1～7点で数値化し改善状況を評価（FIM：機能的自立度評価法）しながら、次のリハプランを検討し、在宅復帰目標にむけて必要に応じて回復期リハを担う亀田リハビリテーション病院などへ診療を繋げていきます。2022年に入院した脳梗塞患者の約7割が在宅復帰しています。

G棟5階のリハビリテーションセンターに加えて、各病棟にリハビリスペース（多目的室）を置くことで、病態に関わらずリハ治療に取り組みやすい環境を整えています。病棟に活動拠点があることで、各診療科の主治医や看護師とも密なコミュニケーションが取れるため、医療の質の向上に役立っています。

臨床データの可視化と分析

日々変化する急性期医療の現場に柔軟に対応するため、リハ部門ではリハの処方件数や実施患者数、提供単位数など日々の稼働状況といったリハ医療の提供にかかる指標を、日単位、週単位、月単位で可視化・分析しています。

亀田総合病院リハビリテーション室の彦田直室長によれば、「実際、コロナ下においてこれまで経験したことのない急激な入院患者数の変動やセラピストの急な欠員という場面に遭遇。日頃から各指標を可視化して、分析していたことで、リハが必要な患者数とセラピストの需給バランスを確認し、速やかにセラピストの配置転換をすることで、リハを必要とする患者さまに必要な医療を提供することができた」といいます。

リハビリテーション事業管理部 副部長
亀田総合病院 リハビリテーション室 室長
彦田 直 理学療法士

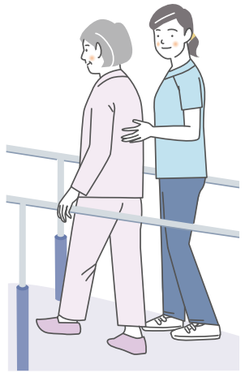
また、こうした指標は管理者だけでなく、すべてのセラピストに適切かつ円滑に情報共有することを心がけているそうで、前述のビジネスチャットで毎日自動配信しています。

各指標をタイムリーに可視化できる背景には、日々のさまざまな業務においてICTの積極活用があり、これまで紙ベースで行なっていた業務を可能な限りペーパーレス化できるよう業務改善を行ってきたことが挙げられます。結果的にセラピストの情報活用能力も向上し、各指標を根拠に組織運営に関する積極的な意見交換が可能になりました。

各診療科の医師に話を聞くと、「リハセラピストはチーム医療に欠かすことができない存在」という評価をよく耳にします。そう口にする医師たちの診療科は多岐にわたり、退院後の生活を見据えたリハ治療がきめ細かく行われていることに驚きます。また、病棟からリハビリテーションセンターへ向かう患者も、意欲的にリハに取り組んでいる方が多く、セラピストは患者の歩行速度に合わせながら転倒することがないよう必要なサポートを行いつつ、患者自身による歩行を促します。

社会ニーズの増大により、ますます重要性を増している急性期リハ。限られた地域の医療資源のなかで、早期の退院やスムーズな回復期への移行をめざし、再びその人らしく生活を続けてゆけるよう、臨床データの可視化やICTの活用を通じて品質の精度を高め、業務の効率化に真剣に取り組む姿がありました。すべてはリハ医療を必要とする全患者に質の高いリハ医療を提供するために。

アテンディングセラピスト養成講習の様子



看護の目

患者さま対応から学んだ大切な気持ち

PSR課第2　笹本 未来

患者サービスの代理人。他院にはない職種にとても興味を持ち、入職前から自分が患者さまに対して出来ることを色々と考え、PSRの仕事に就き3年目になりました。

私が担当する糖尿病内分泌内科は、患者さまの人数が多く、声掛けや電卓を使った物品の計算や診察のスピードが早いこともあり、最初は不安だらけの毎日でしたが、先輩方の丁寧なご指導があり今日まで仕事を続けてこられたことに本当に感謝しています。

私はPSRとして、どの患者さまに対しても、どんなに忙しくても明るく気持ちのいい対応を心掛けています。最近では糖尿病内分泌内科と呼吸器内科の待合室は座りきれないほど混み合い、疾患を持った患者さまが座ることが出来ない状況を見ると、とても心苦しくなります。少しでも自分に出来ることを考え、混み合っていることに対しての謝罪と診察までのだいたいの待ち時間や順番、耳や足の不自由な方やご高齢の方がブロック前やトイレ近くにお座りの際は「診察時に呼びに来ますので安心してお待ちください」など、待ち時間の不安を少しでも解消するような声掛けをするようにしています。すると、「丁寧にありがとう」と不安そうだった患者さまが穏やかな表情になる様子に私自身の仕事のやりがいを感じます。

中待合室で患者さまに対して分かりやすくハキハキと対応をすると、他科の患者さまにも手を挙げて声を掛けられることがあります。どの患者さまも待ち時間への不安をお持ちで、「担当者に確認して参りますね」と、どの患者さまにも平等に丁寧に対応しています。

入職して間もない頃、中待合室で悲しそうな顔をしながらも、困った様子でスタッフに声を掛けられずにしばらく立っている女性がいました。気になったので「どうされましたか？」とお声掛けすると「〇〇さんという看護師さんはいますか？」とのこと。お話を伺うと、亡くなったお母様が通院時、毎回大変親身に対応してくれた看護師さんへ、母に代わってお礼を伝えたいとのことでした。「受診でもないし、皆様お忙しそうで申し訳ないのですが…」と恐縮する女性にお待ちいただき、事情を説明し、他の看護師さんへ対応をお願いしました。その方は想いを伝えることが出来て本当に嬉しそうな様子で、帰り際に涙を流しながら「お仕事お忙しいのに声を掛けてくださり本当にありがとうございました。お陰で母に代わってお礼を伝えることが出来ました」と言ってくださり、とても温かい気持ちになりました。

年月が過ぎると、患者さまの顔や名前、注意しなければならないことも自然と覚えるようになりました。腰が悪く長時間座って待つことが困難で、待ち時間にベッドで横になることがあった患者さまが次の受診時は車椅子に乗って来院されました。「今日はお一人ですか？」と声掛けすると、「一人暮らしだから、ずっと一人なんだよ。車椅子一人で動かせるから大丈夫だよ」と切なそうな表情で足で車椅子を進ませる姿を見て、診察時に「〇〇さん、今日は私に車椅子を押させてくださいね」と診察室に向かう途中に「いつも迷惑ばかりかけて申し訳ない。こんなに人に世話になってばかりいると生きていることも申し訳なくなってくるね。ごめんね。でも、ありがとう」と涙声でお礼を言われました。それから待合室でその患者さまを見かけると、ひと言声を掛けるようになりました。

色々な患者さまの背景があり、疾患を持っていることに対してもデリケートな対応が必要で、だからこそ診察までの間に私達PSRという仕事がとても大切な職種なのだと感じています。

自らが患者さまと向き合って親身に対応していく気持ちは仕事だけではなく社会でも家庭でも子育てでも通じていく大切な気持です。そのことを深く教えてくださったPSRという仕事に私はとてもやりがいを感じています。この気持ちを大切にこれからも日々の業務でたくさんのことを学んでいきたいと思います。

帰りは笑顔で

PSR課第2 課長　髙関 郵子

PSR課は、クリニックが開設された1995年に誕生し、今年で28年になります。当初から比べると、時代と共に業務内容も変化していますが、PSRとしての基本である「患者さまが心地よく、より円滑に外来診療を受けるために必要な援助を行うこと」「帰りは笑顔で」の気持ちで患者さまに対応しています。

外来は、患者さまとその時その瞬間での対応であり、第一印象で良し悪しが決まってしまい、最初にかける言葉一つ、接遇が大切になります。今回の体験は患者さまの気持ちに寄りそった行動がとれ、話し掛けやすい雰囲気と安心感が表れていた結果だと思います。今回の経験から、限られた時間の中で常に患者さまの立場に立った対応ができていることをうれしく思います。自身が経験したことを、PSR課全体で共有し今後の業務に活かしていけるよう日々学びを大切にしていきましょう。

CLOSE UP NEWS

クローズアップニュース

災害訓練を実施

近代日本の首都圏に未曾有の被害をもたらした関東大震災から今年で100年。各地で防災意識の向上を目的とした啓発イベントが盛んに開催されるなか、当院でも9月2日（土）午後、南海トラフ地震を想定した災害訓練が行われました。

全世界で発生したマグニチュード6以上の地震の約2割を占めると言われる地震多発国・日本。今後30年以内に発生が予想される巨大地震がいくつも存在しますが、そのなかでも特に被害が大きいとされる地震の一つが「南海トラフ地震」です。政府が2019年5月に発表したデータによると、死者23万1,000人、全壊または焼失する建物は209万4,000棟と予測され、千葉県でも最大11mの津波、最大震度5強の揺れが想定されています。

そこで今回は、診察時間中に紀伊半島を震源とする大規模地震が発生し、当院も津波被害により1階が冠水。周辺道路も通行不能になったというシナリオのもと、籠城をしながら診療活動をいかに継続するのかを課題に災害対策本部の実地訓練と、昨年完成したG棟での帰宅困難者の受け入れ訓練を実施しました。

実際に訓練を行ってみると、事業継続計画（BCP）では詰め切れていなかった運用上の課題や物品の過不足など、大小さまざまな問題点が抽出でき、災害への備えを再点検する絶好の機会となりました。

献腎移植実施施設とHLA検査施設に認定

越智敦彦医師

髙梨弥生看護師

亀田総合病院は2022年9月より献腎移植が実施できる日本臓器移植ネットワークの腎移植施設に登録されています。これまでは患者さまのご家族（夫婦間も含む）から腎臓の提供を受ける生体腎臓移植を実施してきましたが、亡くなられた方からの腎臓提供があった場合に移植を受ける、献腎移植に登録できるようになりました。また、2023年9月からは移植に必要な白血球の型（HLA）を調べる、日本臓器移植ネットワークのHLA検査施設にも認定されました。HLA検査施設は全国的にも数が少なく、現在、千葉県内での認定施設は当院のみです。

献腎移植実施施設に登録されたことについて、腎移植科外科担当責任者の越智敦彦医師は、「現在、献腎移植は実際に移植できるまで多くの場合10年以上と長い待機期間が必要です。しかし、ご家族からの腎臓の提供が難しい腎不全の方にとっては希望となるのではないかと思います」とコメントしています。献腎移植の登録や、検査などの手続きについては、レシピエント移植コーディネーターである髙梨弥生看護師がしっかり患者さまをサポートする体制も整えているとのこと。

今回、亀田の臨床検査室がHLA検査の認定施設となり、一層安心して受診していただける体制が整ったことから、越智医師は、腎移植についてご検討中の方や、もっと詳しく知りたいという方はぜひ当科にご相談くださいと話しています。

長狭高校 医療・福祉コース 医療体験実習

8月8日（火）・9日（水）の2日間、千葉県立長狭高等学校（山口健一校長、以下長狭高校）医療・福祉コースの「医療」分野で学ぶ3年生27名が、当院で医療体験実習を行いました。

亀田グループでは、長狭高校と2015年に教育連携協定を締結し、地域の医療・福祉人材の教育に向けて、専門職種による出張授業をはじめ、様々な形でカリキュラムのサポートを行っています。

この医療体験実習は、希望する職種に影のように密着し、日常業務をつぶさに見学し、その職種への理解を深めることを目的としているため、通称シャドー体験学習と呼ばれています。

事前に各自の実習先希望を募り、2日間の予定が組まれ、看護師、臨床検査技師、診療放射線技師、理学療法士、管理栄養士、救急救命士、歯科衛生士、歯科技工士の職種に分かれて体験実習を行いました。中でも希望者が一番多い看護（2日間実習4人、1日のみ実習11人）では、担当看護師について、バイタルサイン（血圧、脈拍、呼吸、体温）の観察の仕方、患者さまとのコミュニケーションなどの体験学習を行いました。

参加した生徒からは、「ずっと憧れている職業（看護師）を2日間連続で体験できて良かった。患者さま一人ひとりに合った接し方をし、不安をなくすような会話を心がけていることを感じることができた。患者さまが一番信頼しているのは、看護師さんの人柄なのではないかと思った」「看護師という職業は、患者さまの一番そばにいて一番変化に気づけるという素晴らしい役割があるのだと実感することができた。看護師さんたちの患者さまへの接し方を見て、コミュニケーション能力を高めようと思った。また、ただ考えているのと実際に見るのとでは、看護師に対しての印象や価値観が変わると感じた。2日間実習をやってみて、大変だと感じることも沢山あったけれど憧れの方が強くなった」「臨床検査技師に興味があり、夏休みに行っている臨床検査技師体験（スチューデントセミナー）に参加したことがある。事前に仕事内容や検査の種類を調べ、今までの実習で少しは知っていたが、今回のシャドー研修で、臨床検査技師が救命救急チームや集中治療室でも活躍していることをはじめて知り、驚いた。検査結果をもとに医師が診断を下すので、とても重要な仕事になるが、臨床検査技師になって人々の命を救いたいと思った」「理学療法士の実習を終えてみて、自分が思っていたリハビリテーションとは違い、寝たきりの人や半身麻痺がある人、一人で動ける人、介助が必要な人など様々な患者さまがいることに驚いた。また、患者さまの日々の成長を見ることができ、リハビリが終わる時には、『ありがとう』という言葉を多くの患者さまから聞くことができ、やりがいのある仕事だと感じた」「診療放射線技師の皆さんは、患者さまとのコミュニケーションをとても大切にしていることがわかった。最初のあいさつや患者さまを間違えないようにする本人確認、患者さまへの声かけなど、全てが『患者さまのため』に繋がることを実感した。地域の方とのコミュニケーションを大切にして、技師として働けるようになった時に、患者さまが不安にならないように接することができるようにしていこうと思った」「実習を通し、救急救命士は多職種の方々と関わりながら医療の最前線で働く仕事だということを強く感じることができた。男性が圧倒的に多い職種に女性が就くことで『必要がない』『負担になるだけ』と思う人が多いのかなと考えていたが、患者さまにとって同性であることで、それぞれの性にしかわからない悩みにも対応できると分かり少し安心した。日々どのような業務にも全力で取り組み、体力もしっかりと身につけ、より多くの人から信頼される救急救命士を目指したい」「長狭高校が亀田総合病院と連携していることで、本格的な実習を高校生のうちに経験させてもらい、とても凄いことで光栄だと思った。今回の貴重な経験を将来につなげていきたい」などの感想が聞かれました。

12月1日（金）には、体験実習を受け入れた部署スタッフ向けに、今回シャドー研修に参加した生徒による「医療体験実習発表会」を行う予定です。

祝

オルカ鴨川FC 2023プレナスなでしこリーグ1部優勝

Student Seminar 2023開催

8月28日（月）午後2時30分から、医療職をめざす高校生を対象とした「Student Seminar 臨床検査体験」（協賛：アボットジャパン㈱）が開催され、千葉県立安房高等学校の生徒6名と千葉県立茂原高等学校の生徒2名が参加しました。

2012年からスタートし、今年で12回目を迎えるこのセミナーは、実際に臨床検査技師の仕事を体験してもらうことで、医療を支えるさまざまな職業に目を向け、進路の参考にしてもらうことを目的としています。

全体説明のあと、参加者は2人～3人ずつ3班に分かれ、①ダミー人形の腕を使用した採血検査、②人体を使用した心臓超音波検査（心エコー）、③血液・輸血検査の3つの体験にチャレンジしました。また、新型コロナウイルスPCR検査装置の見学も行いました。

このセミナーは、8月21日（月）千葉県立長狭高等学校の生徒（3名参加）を対象にも開催され、両日で11名が参加しました。

参加した高校生からは、「臨床検査技師をしている親の仕事と同じ内容を体験したかったので参加した。初めは、すごく緊張したが親切に教えていただき体験も楽しく、参加して良かった」「臨床検査技師の職業に興味があり、この機会に学びたいと思い参加した。インストラクターの皆さんがわかりやすく教えてくださり、更に興味を持つことができた」「想像していたよりも難しくて、この作業をスムーズに進められるのはすごいと思った」「血液型の調べ方について、ずっと気になっていたので知ることができて嬉しかった」「採血検査がいちばん難しいと思っていたが、エコー検査の難しさがわかり驚いた」「ふだん見ることのできない院内の様子を見ることができておもしろかった」などの感想が聞かれました。

閉講式では、亀田総合病院の亀田俊明院長から一人ずつに修了証が手渡されました。

歯科口腔外科が「学術奨励賞」を受賞

日本口腔外科学会雑誌35巻（2022）1号で当院歯科口腔外科が臨床報告をした論文「診断に苦慮した頬部結節性筋膜炎の一例」（松本真由子、西久保周一、松田博之、渡辺伸也、田村英俊、外木守雄）が、日本口腔診断学会の学術奨励賞を受賞しました。

報告症例は、近年臨床応用が進む低レベルレーザー治療（Low Level Laser Therapy：以下LLLT）を他院で受けた後、病変の急速な増大により開口障害と痛みを引き起こした可能性のある局所浸潤性結節性筋膜炎の一例で、病理組織学的には病変は細胞診および生検によって確定診断には至らず、外科的切除後の最終病理診断にてようやく「結節性筋膜炎」と診断されたもの。

歯科口腔外科部長の田村英俊歯科医師によれば、「本論文は疼痛緩和や抗炎症作用、創傷治癒促進、血流改善、神経機能の回復促進などが期待できるとして、LLLTの適応を十分に考慮する必要があることを、当院の経験症例から臨床報告したもの」だと言い、「論文が認められ学術奨励賞を受賞でき、大変嬉しく思います」と喜びのコメントを語ってくれました。

地域医療連携交流会「介護施設の看取り」テーマに開催

8月9日（水）午後6時半より、4年ぶりとなる対面での「地域医療連携交流会」が亀田総合病院Kタワー13階ホライゾンホールにて開催されました。

12回目となる今回は「介護施設の看取り」がテーマ。日本社会は2008年に人口のピークを迎え、その後、緩やかな人口減少社会に突入しました。高齢化の進展と共に、死亡者数も増加傾向にあり、2000年には約96万人だった死亡者数が昨年2022年は約156万人に増え、2030年には約160万人という「多死社会」を迎えます。生産人口が減少するなかで、安心して最期を迎える「看取り」の場の不足が、社会全体の大きな課題となっています。また、人生の最期をどこで、どのように過ごすのか。意思決定の支援や、本人の意思に基づく医療・介護の提供が重要性を増しています。

そこで今回は、初めて「介護施設の看取り」に焦点を当て、介護老人保健施設の取り組み例として医療法人社団優和会「館山ケアセンター夢くらぶ」（館山市山本）、特別養護老人ホームの取り組み例として社会福祉法人太陽会「めぐみの里」（鴨川市大幡）、病や障がいがあっても最期までその人らしく暮らせる「家」としてケアを提供するホームホスピス®の取り組み例をNPO法人フローラファミリー（鴨川市北小町）から、それぞれご紹介いただきました。

日頃交流の機会の少ない医療機関と介護施設の職員同士、質疑応答では率直な意見が交換されるなど、地域の医療・介護従事者約100人が集まり、親睦を深めました。

呼吸器内科 永井医師ダブル快挙！

2023年9月に開催された欧州呼吸器学会（ERS）にて、当院呼吸器内科医長の永井達也医師が非HIVニューモシスチス肺炎に対するST合剤低用量治療の有効性を報告した多施設研究について発表をし、ERS/JRS Young Investigator 2023を受賞しました。この賞は40歳以下のとくに優秀な演題を発表した会員に贈られるものです。

またこの研究は呼吸器内科のトップジャーナルでもあるChest誌にも採択されました。ダブル快挙について永井医師は「このような栄誉ある賞を受賞させていただき、またChest誌に採択されたこと大変うれしく思っております。たくさんの方々に支えられ、本研究を行う事ができました。本論文が多くの人々に読まれ、より良い治療につながることを願っております。今後も日常臨床のみならず、臨床研究において、医学の発展に貢献できるよう精進してまいります」とコメントしています。

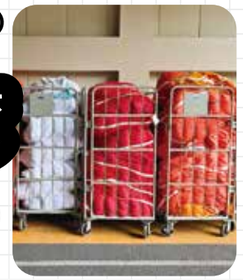
『正しいエクササイズがわかる本』

スポーツ医学科主任部長の大内洋医師や亀田スポーツ医科学センターのアスレティックトレーナーが執筆したエクササイズ本『亀田メディカルセンターが実践しているスポーツ医学的に正しいエクササイズがわかる本』（株式会社法研、2,200円）が9月末に発売されました。

健康づくりのために運動に取り組むときに注意したいのが、正しい知識に基づいて行うこと。知識なく闇雲に行うと、体を痛めたり、ケガをしたり、思わぬ結果を招くこともあります。また、エクササイズを行う目的やその人の身体のレベルによって、取り組むべき内容も異なります。

本著では、医療法42条で認められた医療法人が運営する医学的要素を取り入れた運動施設（メディカルフィットネス施設）として、日頃からひとり一人の状態に合わせて、きめ細かな運動指導を行っている「亀田スポーツ医科学センター」のノウハウの一端を、図や写真を交えながら詳しく解説しています。ぜひ、ご家庭でのエクササイズに取り組まれる際の参考になさってください。（全国の書店、オンライン書店で発売中）

病院は誰かの仕事でできている



今回の部署

CSセットカウンター
（ワタキューセイモア株式会社）

患者さまやご家族の負担を減らし、より衛生的な環境で療養生活をお過ごしいただけるよう感染管理の面から2019年3月に導入された「ケア・サポートセット」（以下CSセット）。入院時に必要となる衣類・タオル類・日用品・オムツ等の日用品をセットにして、1日単位でレンタルできるサービスとして、コロナ下でその利便性への理解が進みました。

サービスを提供するのは、今年で創業151年を迎える「ワタキューセイモア株式会社」。病院寝具リースを主体に、長年医療と介護関連を対象としたさまざまな業務を提供してきたノウハウを活かし、縁の下の力持ちとして患者さまの快適な入院生活をサポートしています。

【1日に出る洗濯物の総重量】

- 浴衣：約100枚/日
- 甚平：約300枚/日
- ズボン：約300枚/日

（衣類合計重量：約180kg/日）

- バスタオル：約250枚/日
- フェイスタオル：約1,000枚/日

（タオル合計重量：150kg/日）

＼やりがい／ ＼仕事の魅力／ ＼大変なこと／

患者さまの“あったらいいな”に応える

「緊急入院となってしまい準備ができなかった」「洗濯など家族に負担をかけたくない」「短期入院なので必要な日用品をレンタルできると助かる」などなど、患者さまの“あったらいいな”に応えるサービスを提供することで、慣れない入院生活を少しでも楽に、治療に専念できる療養環境づくりのお手伝いができればと思っています。

POINT 当院には地域の患者さまを中心に遠方からの入院患者さまも多くいます。コストはかかるものの、入院の持ち物を減らせるメリットがあるほか、ご家族も洗濯して持っていく労力や手間が減り、限られた面会時間を有効に使うことができます。

病院スタッフとの意見交換でサービスを改善

CSセットカウンターのスタッフが患者さまと対面するのは入院時のみ。実際にサービスを利用された患者さまの声を直接聞く機会はほとんどありません。そこで、患者さまを間近でケアする看護部などと定期的に意見交換を行うことで、サービス向上のヒントを得ています。

POINT 病院のリネンサプライ事業で長年にわたる取引実績と信頼関係があるからこそ、病院からも率直な意見を出しやすい風通しの良さがあります。

品質へのこだわり

日々使われるタオル類は清潔が第一。感染症の流行期も安心してご利用いただけるよう、洗濯工場では80度の温水を使って「高温洗濯」を行うことで、繊維についた皮脂汚れや雑菌を取り除き、清潔な洗濯物を患者さまに毎日お届けしています。

病衣（患者衣）は患者さまの肌に直接触れるものなので、機能性と共に着心地も重要。入院中は点滴や血圧測定など腕をまくることが多いため袖口はゆったり、術後の処置やケアをしやすい前開きのものを2種類（上下が別々の作務衣型、浴衣型）用意。いずれも軽くて丈夫、吸水性に優れた素材の生地なので、敏感肌の方も安心して着用いただけます。

工場から納品された洗濯物は、“ほつれ”や“汚れ”が残っていないか、提供前にも目視でチェックするなど、少しでも快適にお使いいただけるよう気を配っています。

POINT 清潔なリネンアイテムを提供するため、寝具類洗濯業務で「医療関連サービスマーク」を取得するなど、徹底した衛生管理と品質管理を実践。家庭ではできない高温洗濯を行うなど、長年培った洗濯の知識を活かし、高品質・安心安全なサービスの提供に努めています。

CSセットの疑問にお答えします

衣類やタオルの交換頻度について教えてください

毎日交換されるわけではありません。汚れてしまった時や急なご入用の際など、必要なタイミングで病棟スタッフの方へお声がけください。着替えの枚数や配布枚数を気にすることなく、必要な時に必要な枚数をご利用いただけます。

医療費控除（所得税）の対象になりますか？

CSセットは医療費控除（所得税）の対象外です。また、高額療養費も対象外となります。
ただし、紙おむつプランは医療費控除の対象となる場合があります。自治体により必要書類が異なりますので、お近くの自治体（役所・役場）窓口・税務署へお問い合わせください。

SECRET

こぼれ話

どんな時もサービスの継続に全力で取り組む

今年9月の台風13号では線状降水帯の発生により鴨川市をはじめ記録的大雨を各所で観測。院内には災害対策本部が設置され、診療活動は継続しながら、施設内で発生した被害の把握と対応に追われていました。

ここCSセットカウンターでも、通常どおり入院患者さまへの案内業務を行う裏側で、衣類やタオル類の保管庫兼事務所があるA棟1階が冠水する事態が発生。また配送トラックも、主要道路の通行止めにより納品を断念し、佐倉工場へ引き返すなど緊急事態が起きていました。

短時間で目まぐるしく状況が変化するなか、次の納品があるまで院内にタオルやシーツ類の利用について協力を呼びかけつつ、道路の通行止め解除を待って翌朝一番での納品を調整するなど、患者さまへの影響を最小限にするための対応が続きました。

・元はママさんバレー仲間

かれこれ10年来の友人というNさんとSさん。元をたどればお子さんの学校の「ママさんバレー仲間」として出会い、意気投合。お互いに子育てが一段落した今は、毎週土曜日の晩に肴を持ちよりNさんの自宅に集うのが習慣化。同世代同士、毎週どんなに語りしつくしても、話題はつきないとか。

・外食で気分転換

食べることが好きだというKさん。知り合いから聞いたお店情報を参考に、一人で、友人と、娘さんと、外食時間を楽しんでいる。最近のお気に入りは「カフェランプ」（鴨川市横尾）さん。味はもちろん、目でも楽しめる料理は絶品！

・テレビでのサッカー観戦

コロナ下の少し前に東京から地元・館山にUターンしてきたMさん。東京時代は映画やライブに出かけるなど休日をアクティブに楽しんだが、最近はテレビでサッカー観戦をするなど家でのんびり過ごすことが増えた。もともと旅行がすきで、久しぶりに温泉で美味しい食事を楽しむ時間を持ちたいと思っている。

亀田総合病院報

No.276

亀田ホームページ　https://www.kameda.com

2023年11月1日発行（隔月発行）　発行責任者：亀田隆明　編集：広報企画室

発行：医療法人鉄蕉会　〒296 - 8602 千葉県鴨川市東町 929

当広報誌は個人情報保護のもと本人の了承を得て作成しており、本用途以外の転用は固くお断りしております。
All articles on this PR magazine has been printed under the permission of the subscriber to protect their personal information.
All editorial content and graphics may not be copied without the permission of Kameda Medical Center, Public Relations which reserves all rights.